

知多半島ケーブルネットワークコミュニティ誌 [ココナッツクラブ]

COCONUTS CLUB

MAY
2019

5

平成の知多半島観光史



平成の 知多半島 観光史



5月1日、いよいよ新しい元号「令和」に変わる。

平成が終わるこの機会に、知多半島の平成の30年間の
観光面から振り返ってみたい。

昭和から大きく様変わりした平成の観光事情を検証して、
次の時代の観光のありようを探ってみる。

- 常滑市 ● 武豊町 ● 美浜町 ● 南知多町
- 他の自治体・半島全域

昭和後期～平成の知多半島観光史年表

昭和53年／1978

- 南知多グリーンバレイ [開]

昭和55年／1980

- 南知多ビーチランド [開]

昭和57年／1982

- 内海フォレストパーク [開]
- 登窯が国の重要文化財に指定。これを機にやきもの散歩道のPRが活発化

昭和60年／1985

- 國盛 酒の文化館 [開]

昭和61年／1986

- INAX窯のある広場・資料館 [開]
- 豊浜さかな広場 [開]
- 博物館 酢の里® [開]

昭和62年／1987

- 杉本美術館 [開]

平成元年／1989

- えびせんべいの里 [開]

平成2年／1990

- 盛田味の館 [開]

平成3年／1991

- 世界のタイル博物館 [開]

平成5年／1993

- 常滑焼卸団地セラモール [開]

平成6年／1994

- 新美南吉記念館 [開]

平成7年／1995

- 登窯広場・展示工房館 [開]
- 魚太郎本店 [開]
- 手織りの里 木綿蔵・ちた [開]

平成8年／1996

- ジョイフルファーム鵜の池 [開]

平成9年／1997

- つくだ煮街道 [開]

平成12年／2000

- 廻船問屋瀧田家公開開始
- JAあぐりタウン げんきの郷 [開]

平成13年／2001

- 観光農園花ひろば [開]
- 南知多いちごの里 [開]

平成14年／2002

- 常滑市観光プラザ [開]

平成15年／2003

- 内海フォレストパーク閉鎖

平成17年／2005

- 中部国際空港・セントレア [開]
- セントレアライン [開]
- 師崎一鳥羽フェリー廃止、常滑一鳥羽フェリーが就航
- INAXライブミュージアムがグランドオープン
- 食と健康の館 [開]

平成18年／2006

- 常滑中央商店街振興組合で「陶彫のある商店街」スタート
- ぎやらいい 夢乃蔵 [開]
- 内田佐七家の定期公開を開始

平成19年／2007

- とこなめ招き猫通り整備
- いちごの丘 [開]
- 常滑一鳥羽フェリー廃止

平成20年／2008

- 知多四国開創二百年

平成23年／2011

- NHK大河ドラマ「江～姫たちの戦国」放映を受け一年間限定で尾張大野歴史資料館を開設

平成24年／2012

- めんたいパークとこなめ [開]
- 常滑市歴史民俗資料館・陶芸研究所・研修工房をとこなめ陶の森に統合
- 師崎一伊良湖フェリー廃止

平成25年／2013

- 3代目羽豆岬展望台 [開]

平成26年／2014

- 島の駅 SHINOJIMA [開]

平成27年／2015

- マルハリゾート [開]
- 三井家住宅が国登録有形文化財に登録され定期公開を開始
- イオンモール常滑 [開]
- 半田赤レンガ建物 [開]
- ミツカンミュージアム [開]

平成28年／2016

- たけとよ地域交流施設・まちの駅 味の蔵たけとよ [開]

平成29年／2017

- 土管坂休憩所 [開]

知多半島はセントレアを観光に活かしてきたか？



で知多半島の良さを引き出し発信しているという雰囲気も醸成されている。

そんな平成の知多半島の観光において最もインパクトがあったのは、平成十七年（二〇〇五）に中部国際空港・セントレアが開港したことだろう。知多半島のみならず、愛知県あるいは中部地方にとっても最大級の出来事と言って間違いあるまい。

セントレアとは知多半島にとってどのような空港なのか、ここで改めて見てみたい。

中部地方を変えたメガ施設

常滑中心部からわずか数分、海を渡るそこは別世界だ。知多半島にありながら、知多半島とはまったく異なる空間。それがセントレアである。

メインエントランスともいえる「アクセスプラザ」のホールから傾斜の緩やかな

坂道を登って、国内線・国際線が同一フロアになっている出発ターミナルへ。中央のエスカレーターを昇ると広々とした「イベントプラザ」があり、右手に「ちようちん横丁」、左手に「レングス通り」という対照的な和洋の買い物・飲食エリアがある。ショッピングモールと似てはいるが、町並み的な構造と旅気分が満ちる雰囲気はモールのそれとは少し種類が違い、どこか異世界めいて楽しい。そしてイベントプラザから外へ出ると、滑走路の真ん中の方へ向かって「スカイデッキ」が長く伸びる。爽快な風景の中、飛行機を眺めてぶらぶら歩いていると、たちまち日常を忘れそうになる。

これから旅に出る人、ここまで旅をしてきた人、大勢の人が行き交うセントレアは常に賑やかだ。ただし、その賑わいは旅行者だけがもたらしたものである。空港そのものを目的に訪れる人も、実はかなりの割合で存在するの

だ。セントレアによると、飛行機を利用しない来場者数が、実に年間約六百四十万人※1という。セントレアとイオンモール常滑を除いた常滑市への観光客数はおよそ二百五十五万人※2なので、その集客力は圧倒的だ。

これだけの集客がある理由はいくつもあるが、ひとつは建設前から集客を考慮した設計・デザインがなされていたことが挙げられる。誰でも使いやすいシンプルな構造、多彩な商業施設の分かりやすい配置、他空港にはない迫力満点のスカイデッキ、当初は全国でも珍しかった空港内入浴施設など、セントレアならではの特徴が目白押しである。

そしてもうひとつは、さまざまな企画を継続的に行っていることである。イベントプラザやセントレアホールなどで行われる様々なイベントには、多くの読者が行ったことがあるのではないだろうか。広報の坂本裕宣さんによると「土、

平成にこれだけの施設ができた

まずは3ページに掲載した「昭和後期〜平成の知多半島観光史年表」をご覧ください。

この年表は、CNCエリアの四市町を中心とした知多半島の著名観光施設のオープン年と、観光に関連する主な出来事をまとめたものである。

平成の約三十年間に、実に多くの施設が誕生したものだ。二十一世紀に入ってから動きは記憶に新しいが、平成一桁代だと「そんな最近なのか」「思っていたより昔だな」など意外に思われる読者も多いに違いない。

参考までに、昭和にオープンした主要施設も挙げておいた。その多くが名鉄、INAX（現LIXIL）、ミツカンなど全国的知名度のある大企業が設立に関わっている。ところが、平成に入るとローカルの企業や団体、行政などが関係しているものが目立つようになってくる。平成は、より知多半島のカラーが色濃く、そして深みを増した時代とも言えるだろうか。

これは知多半島に限らず全国的な流れでもあるが、平成時代には観光における「地域性」と「地場産業の振興」が年々重要視されてきたからであろう。今ではそこからさらに進化し、地域の人々が地元への関心を高め、自分たち

日曜にはほぼ必ずイベントプラザのステージで何かの企画を開催しています。別棟にあるホールでの催しも多いです。またスカイデッキで行う冬のイルミネーション、夏の盆踊りにも多くの皆様に足を運んでいただいています」という。昨夏で十回目の開催となった盆踊りは常滑市文化協会との共催で、セントレアの職員も市内で行われる練習に参加して踊りを覚えていたとか。

空港内ではさまざまな形での観光PRや旅行者のサポートも行われている。中部地方全体の玄関口なのでPRは広域にわたっており、近年急増している中華圏からのインバウンド（訪日外国人旅行者）に対応するため中部九県が一体となって取り組んでいる観光推進プロジェクト「昇龍道」の案内を随所で見かける。

そのような中で、お膝元の知多半島に関してはどうのような取り組みをしているのだろうか。ちようちん横丁には、



※1 平成29年度の統計による。出典：東海エリアデータブック2019 ※2 平成29年の統計による。資料提供：常滑市

えびせんべいの里が人気を保ち続けているのはなぜか？



まるは食堂、えびせんべいの里、J A A グリス直営店といった馴染み深い店があるし、空港内のショップで取り扱われている地場産品も多い。それだけでなく、近年は知多半島の情報発信を強化すべく、セントレアとイオンモール常滑をコアメンバーに自治体や関係企業・団体が横断的に連携して知多半島の魅力向上を目指す「CHITTA CATA プロジェクト」を、平成二十七年（二〇一五）から推進している。坂本さんは「知多半島は魅力が凝縮したエリア。様々な連携を活かしながら、その魅力を発信していくことが大事であると考えています」と話す。

東海地方では確たる地位を築いている知多半島だが、海外はもとより東海地方から一歩外に出ると、その知名度は我々が思っている以上に低いのが現状だ。全国発売の観光系雑誌に取り上げられることも少ない。セントレアを軸とした基盤が整えられてきた今、それを効果的に発信する力がより一層求められるだろう。

工場見学の先駆者として

セントレアは別格としても、知多半島には多大な集客力を誇る有名観光施設が点在している。その代表が美浜町の「えびせんべいの里」だ。平成二十九年の来館者数は約百二十六万人（※3）

で、知多半島ではセントレアに次いで堂々の二位である。

南知多道路の美浜インターを下りてすぐ、里山と溜め池に囲まれたのどかな場所に、道路を挟んで大きな工場が建っている。駐車場には自家用車や観光バスが一日中引きも切らず、その人気ぶりが伺える。館内に入ると、広いフロアには色とりどりのせんべいが山積みだ。えびせんべいの里といえばやはり試食のイメージが強い。ここに並ぶほぼすべての商品が試食でき、来館者はそれを少しずつ味わいながら好みのせんべいを探している。

販売フロアの隣は、コーヒーとお茶を飲むことができるゆつたりした休憩フロアで、それに続くのが体験コーナー。自分で焼いたせんべいに醤油やソースで好きな文字や絵を描くというもの。筆者も最近、小学一年生の息子と体験してみたが、子供の顔より一回り大きいサイズのオリジナルせんべいが機械から焼きあがって出てくると、親子そろってものすごくテンションが上がったものだ。

館内を奥へと進むと、工場の製造ラインをガラス越しに見ることができ、見学フロア。次から次へと流れてくるせんべいは見るからに美味しそうで、帰り際に追加購入していきたい欲求に駆られる。実際、厳選した海老を使ったえびせんべいは、口当たりが軽く風味が濃

厚で、その味は誰もが認めるところである。

えびせんべいの里が誕生したのは、奇しくも平成元年（一九八九）である。平成の歴史とともに歩んできたこの施設の足跡を、現社長の白藤嘉康さんに聞いた。

会社そのものは、昭和二十三年（一九四八）に白藤商店として創業したのが始まりである。当初はせんべいの製造業者から製品を仕入れて販売するという業態だったが、程なくして豊浜に工場を設け、自社製品の製造に乗り出すようになる。売れ行きが年々拡大するにつれ工場が手狭になり、昭和四十七年（一九七二）に河和の知多厚生病院付近に移転。その地で十五年ほど操業していたが、病院の近くということで騒音対策の必要に迫られたのを機に、河和から少し奥に入った現在地に工場を再移転する。昭和六十三年八月のことだ。

移転に際して打ち出したのが、小売店舗の併設と、工場を常時見学可能にすることだった。実はこれは、当時の観光業界においてはなかなか画期的な取り組みだった。

産業観光という言葉が定着した今でこそ、工場見学は各所で実施しており、それほど珍しいものではない。しかしこの当時は、社会見学などの団体受け入れはしていても、常時見学可能に

している企業は全国を見回してもまだほとんど存在しなかった。「商品の味には自信がありましたがお客様が二十一年先にも私どもの商品のファンでいていただくためにはどうしたらいいか。その考えから、子供さんに親しみを持ってもらえるようにいつでも見学ができる工場の構造にしたいんです」と白藤さんは当時を振り返る。

最初は、今の半分ほどの規模でのスタートだった。オープンはぎりぎり昭和だがこれはプレオープンのようなもので、平成に入ってから「株式会社えびせんべいの里」を設立したときがグランドオープンと言っている。

しかし、最初から人気を得ていたわけではない。「何しろ近隣に例のない施設でしたので、どうやってPRすればいいのか誰も分からなかったんです」と白藤さん。インターを下りてすぐという立地は一見便利そうだが、当時の美浜インターは出口が下り線のみ、入り口は上り線のみつまり古布（こふ）インターと同じ構造（こうぞう）と使い勝手もいまいひとつ。そんな中で名前を広めてくれたのが、南知多の宿泊施設だったという。知多半島に宿泊して、絶景と海の幸を堪能して、翌日はそのまま知多半島をスルーして次の目的地へ……というのではせっかく知多半島に来てもらったのに勿体ない、という思いが宿泊施設にもあったのだろう。

えびせんべいの里の出現は渡りに船だったはずだ。

白藤さんによると、施設の宣伝広告は今もそれほど大きく展開してはいないという。それでも常時賑わっているのは、施設の楽しさと味の良さが口コミで広がってきたからと思われる。人気施設のベースにあるのは、やはり消費者の心を掴む「確かな味」ともてなしの心だ。積極的な情報発信は大事だがそれも土台があつてこそ。えびせんべいの里の安定的な人気は、そのことに気付かせてくれる。

資源に気付き、そして生かす

平成時代には、観光に対する行政の取り組み方も少しずつ変わってきた。それは冒頭にも記したように、住民が地域とより向き合うようになってきた時代の流れとも関連している。南知多町、美浜町、常滑市が観光に力を入れているのは昭和の頃から変わらないが、観光のイメージが薄い武豊町も本格的な観光PRに乗り出してきたことは、平成の観光史においては特筆すべきではないだろうか。

その端緒となったのが、JR武豊駅と名鉄知多武豊駅を結ぶ「みゆき通り」の中ほどにある「ぎやらりい夢乃蔵」である。古民家をリノベーションした味わいのある建物には、キーテナントとして



※3 出典：東海エリアデータブック2019

「パン工房ながさわ」が入っており、地元の人には人気ベーカリーのイメージが強いかもしれない。しかし、店内には味噌・たまりをはじめとする武豊の特産品を扱う「武蔵屋」という物販スペースが設けられ、また、武豊町観光案内所も併設されている。

事実、観光客にもよく利用されているようだ。パン工房ながさわ店主の長澤晶子さんによると「春休みや夏休みになると、青春18きっぷ（JRグループの普通列車が乗り放題になる期間限定の企画切符）で武豊線に乗って来たというお客さんがけっこうみえるんですよ。イトインスペースで二息入れたあと、名鉄とバスを乗り継いで南知多方面へ行くという方も多いようです」とのこと。本誌二〇一七年五月号「新たなふるさとを求めて」で紹介した豊浜のゲストハウス「ほどほど」が、18きっぷのシーズンにウェブやSNSで武豊経由のアクセス方法を紹介しており、少なからずその影響もあると思われる。

ぎやらりい夢乃蔵がオープンしたのは平成十八年（二〇〇六）。きっかけのひとつは、みゆき通りの沈滞化だ。当時は、長年の懸案である道路整備が進まず、各店舗は老朽化したところが多く、さらに消費者需要が多様化して市街中心部から客足が遠のき、活気が失

われているという状態だった。これを打破して地域に賑わいを取り戻そうと、平成十七年度から住民参加のワークショップを開催。そこでの話し合いをもとにして、町・商工会・商店街が中心となつて空き店舗を改装し、武豊町のPR拠点となるこの施設が誕生したのだ。

平成二十二年（二〇一〇）には観光協会の設立や観光ガイドボランティアの養成など動きを本格化させ、翌年には観光案内所も開設。さらに平成二十八年には、里中地区の転車台ポケットパークの隣接地に「武豊町地域交流施設」をオープン。館内に歴史産業展示コーナーを設け、地場産品が購入できるまちの駅「味の蔵たけとよ」も併設した。ここでは年に五回「味の蔵フェスタ」を開催しており、知名度拡大に積極的だ。

近年の武豊の動きを見ると、外向けのPRが盛んになってきただけでなく、この二つの施設の登場が、地域の人々が地元の良さに改めて気が付くきっかけを作ったように感じる。まずはそこで暮らす人が「自分たちの地元はいい町なんだ」と実感しなければ、PRも集客も始まらない。武豊の全国的な知名度はまだまだ高くないが、その一歩を踏み出したのが平成時代であったことは記憶しておきたい。

観光をキーワードに町を活気づけるには何が必要か？